

別子物語

平成27年5月23日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山閉山のスクープで始まった別子銅山283年間の終末は、我が国の産業、政治の大きな転換期を告げるものでもあった。今日の住友の屋台骨としての事業展開は、日本の近世資本主義の発達史であり、我が国の近代化の物語であり、工業立国日本の歩みそのものであった。そして、現在の工都・新居浜をつくりあげてきたと言える。スクープ後直ちに昭和47年5月30日から昭和48年2月25日まで、57回にわたり朝日新聞愛媛版に掲載された。

華やかさと苦悩に満ちた歴史の終焉に立ち会った記者たちが、4部作でつづった足跡は、昭和49年2月20日に、愛媛文化双書として刊行され、その内容は社会的に高く評価された。43年ぶりに読み返してみる。

2. 本の構成

まえがき

目次

本文	4部構成	第一部 流転	P. 3~
		第二部 くらし・労働	P. 65~
		第三部 公害とのたたかい	P. 129~
		第四部 住友と自治体	P. 177~

あとがき

3. 読み直して気になった箇所

＝詳細添付＝

4. おわりに

この本が刊行されるまでに目にした別子銅山関係書籍は、昭和36年の「にいほまの史跡と名勝」、昭和44年の「旧別子銅山案内」、昭和48年の「明治の別子」の3冊であった。地域の動向と絡めての記述は実に新鮮であった。4冊目の入手から43年が経過すると本棚の別子銅山関係の書籍は210冊に増え、資料は438点になっていた。本棚の7.5mを占拠していた。読み返すと、当時の資料の少なさと、研究が進んでいない状況から訂正しなければならない箇所が多く見られた。

執筆した記者の座談会を付けていたら、未来へのメッセージが話されたのではないかと思った。

読み直して気になった箇所

読み返すたびに気になる箇所が増えてきた。別子銅山を学習する参考にと書き記す。

中表紙裏

銅にして73万トンにも及ぶ

別子開坑300年年を記念して刊行された住友別子鉱山史という正史では、65万トン。

第一部 流転

元禄3年の鉱床調査から昭和48年の東予工場操業まで、別子銅山の歩みを概説する。

- P005 **鉱山は公害の歴止もつくつたが、**
「歴史」の校正ミス。
- P007 **281年も続いたヤマの火は完全に消える。**
283年間。
開坑は元禄4年(1691)閏8月、閉山は昭和48年(1973)3月。
 $1973 - 1691 + 1 = 283$ 年
厳密には初年は5ヶ月、最終年は3ヶ月なので、281年8ヶ月。
今から282年前の元禄3年秋。――西へ西へとわけ入った。
283年前の元禄3年。
- P009 **歓喜坑は銅山峰(1300m)の頂上から南斜面を200mほどさがったところに――。**
銅山峰は1324m。1300mから200m下がった1100mは、第一通洞南口(1096m)になる。歓喜坑道の標高は1203m。
本を読み進めていくと「銅山峰」とは、「銅山越え」のことである。
- P011 **当時、わが国では金、銀、銅を採掘しても精錬の方法が不十分で、銅といっても、その中に銀を多く含んでいた。**
既に、石見銀山や佐渡金銀山では、貴鉛を使って合わせ吹き製錬をしていたので、製錬方法が未熟とは言えない。対馬海流に乗って日本海沿岸に伝播した情報・技術は瀬戸内海に伝播した痕跡が見当たらないが、南蛮吹きのみ謎だけが残る。
- P017 **新居浜海岸への最短運搬路を確保するため、立川を合併したのは約50年後のことである。**
合併したのは約50年後であるが、最短運搬路の第3次泉屋道は元禄15年に確保している。第2次泉屋道と呼ばれている雲ヶ原越えルートは、計画申請で終わっている。
- P017 **赤石山系の谷間に、おわんをふせたようにうづくまる足谷山。**

足谷山は蘭塔場のある小山ではなく、足谷川流域の山城のことである。今でいうところの旧別子エリアのことである。

P018 **写真説明の元禄7年の大火で犠牲になった人たちの霊をまつた旧別子山中の蘭塔場跡。**

元禄7年(1694)の大火災で亡くなった132人の内、元締・杉本助七ほか手代3人は旧勘場(歓喜・歓東坑)から10m下の沢下に土葬された。(銅山略式志の絵では旧勘場から30m下、西150m)当時はここを蘭塔場と呼んでいた。残る128人は、それぞれ手分けして葬られた。火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在の蘭塔場跡には観音堂が設けられた。明治11年(1878)、広瀬幸平が4人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は、旧別子の蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われている。4人の墓碑を山下に移し、殉職者全員の慰霊の場と変わった。そこには両墓制にみられる「拝み墓」と化した。

P018 **多数の殉教者を出した場合の墓地を蘭塔場と呼だという。**

日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる。死者を葬った墓でその霊を祀らず、別の場所に霊のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三味、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に霊を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしよ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。

ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

P019 **別子銅山の元締め杉本助七の姿もあった。**

川田順の「住友回想記」では、杉本の末裔を心齋橋の「おしろい屋・泉勘」と出てくる。杉本勘七は助七の二代目である。

P021 **別子型大鋳床といわれ――1枚板の幅は約1300m、その厚さは2.8m。**

幅1500m、平均幅2.5m、側線の延長は2600m。

P023 **板状の棹銅にして木箱に詰め、長崎に送られていた。**

棒状の棹銅にして。(棹銅には短形と長形があった。輸出用は短形。)

P028 **二人が会った代官所は川之江市川之江町の天理教大教会として残っている。**

広瀬と川田が会談した川之江代官所は松山藩陣屋で、アーケードの近くの、栄町の愛媛銀行川之江支店あたりである。現在は、歴史遺跡として川之江代官所跡の石柱が立っている。川之江町の城山東南麓を切り開いた新政庁への

移転は明治3年正月であるので、川之江町の城山の石垣の写真は間違いである。近所の人に尋ねても分からないはずである。

- P032 **ラロックは銅山峰を南北につなぐトンネルをつくり、**
別子鉱山目論見書によると、トンネルは中七番方面への約1000mのトンネルである。第一通洞と間違っている。ルイ・ラロックは、大阪屋敷から河又を經由しての牛車道を計画していた。
別子銅山目論見書が完全に翻訳されていない間は、距離が約1000mと同じなので、第一通洞と見誤っている。
- P032 ページ32の外人技師のメモは、ページ34に続く。ページ34は、ページ
P033 33につづく。ページ割が前後している。
- P035 **銅山峰の真中を南北に貫通する第一トンネル(一〇一〇ノ)の建設、**
通洞は出入り口が1つの水平の穴。隧道は出入り口が2つの水平の穴、英語のトンネル。片穴の第一通洞を掘り、南側の排水坑の代々坑と繋いで南北をつなぐ隧道とした。
長さは1020m。
- P036 **中持と呼ばれる人夫に頼るしかなかった。**
「中持」の表記は「仲持」である。
- P036 **急斜面の山ハダをけずり、断がい絶壁には軌道を支える張盤を建設するという工法。鉄道作りは困難をきわめた。**
張盤工法は、支柱で天板を支える構造。上部鉄道では、高い石積を積み上げて軌道敷面を確保している。
- P037 **明治二十六年五月。端出場一惣開間一〇・八キロに下部鉄道が、**
端出場一惣開間は、10.46m。
- P039 **機関車は明治25年、ドイツ・ミュンヘン州クラウス社から**
別子1号機関車はドイツ・バイエルン州・ミュンヘン市のクラウス社。別子銅山記念館前の展示説明が間違っている。ドイツの州名の認識がなかった。車体番号から別子1号は4号で、プレートを新たに取り付けている。
- P039 **目出度町には箒はいらぬ おそめお袖のそでではなく**
目出度町には箒はいらぬ お染お仙の袖で掃く (別子銅山せつとう節)
- P040 **明治30年代の人口は12,400人。**
別子山支所の人口統計で明治30年代で最高の明治38年で11,186人。明治中期の人口順は、1位松山市、2位今治市、3位宇和島市、4位別子山村。
- P040 **銅山の守護神、大山祇神社もまつられ、**
本社は大山祇神社で、勧請すると大山積神社となる。勧請は元禄7年の大火の後である。

- P041 **劇場までつくれ、収容人員は、2～3000人。**
旧別子の劇場の収容人員は1000～2000人と言われている。
- P042 **伊丹から杜氏を招き、造った酒が住友のマークの呼び名を入れた「イゲタ正宗」。**
酒造所は明治3年(1870)に設置。同年8月に兵庫県伊丹から杜氏を雇い酒造りに着手したがいいお酒は出来なかった。明治6年(1917)暮れに岡山県南の浦から杜氏を雇ってからようやくお酒らしいものができるようになった。
備中玉島南之浦の近隣一帯は備中杜氏の発祥地。
大正5年の第四トンネルの完成。
第四通洞の完成は大正4年。トンネルは隧道で両穴で通り抜けるが、通洞は片穴で行き止まりである。
- P042 **かつては赤茶けた山はだに植林のスギ、松などがよく茂り――**
建物跡などに植林されているのはヒノキ、松などは自然に回復した2次林である。植林の代表的なのは八ヶ岳山麓から持ってきた落葉松である。
- P045 **当時山形部落にいて**
山方部落である。
- P047 **惣開の洋式精錬所――山根の湿式精錬所――**
惣開製錬所、山根湿式製錬所が正しい。
鉱石から金属をとるのが製錬。高橋製錬所、惣開製錬所、山根製錬所、四阪製錬所。
金属の純度を上げるのが精錬。立川精錬所のみ。
- P048 **幕末の銅山支配人清水惣右衛門がアシの茂る湿地帯を開拓して、鉱山用のコメをとる新田を開いたところから、惣開と呼ばれるようになった。**
清水惣右衛門は、総右衛門。
中世における村は「惣村」と呼ばれる。外敵から自分たちを守るために住居を耕作地から離して一箇所にとめ、自衛したり、水利や道路整備を共同で当てる体制を確立する。近世に移行するにあたって「天下統一」のもとに、惣村の自治能力を弱めるために、刀狩り、検地を行い支配体制の中に組み込んで、惣村に代わって近代的に村落共同体が出来た。惣村から村落共同体としての集落に発展していくことから、「惣開」は清水総右衛門が開いたからでないことは自明のことであるが、新田開発では、皆で開いたので惣開とするのは、惣村を開いていくという歴史的発展形態の繰り返しであり、能動的行為からの命名である。清水が開いたのは小字東惣開である。
宝暦一四年以後の新居浜惣改帳にのっており、また文政一二年の惣改帳には惣開畑の肩に「寛文九酉より享保一二年末これを開く」と掲載されている。
宝暦14年(1764)は、清水総右衛門が新田開発した嘉永年間(1848～1853)

よりも90年ほど前に当たる。

P049 **山根には、約六十坪の山の傾斜に煙道をつけ、さらに二十数坪の煙突を立てた。**

山の標高が約60mの表記か。製錬所と山頂の標高差は約40mで煙道の長さは80間の約145mで、煙突の高さは20.145m。

P049 **明治28年、煙害に反対する農民の声を静めるために山根精錬所は閉鎖された。**

山根製錬所は製鉄と硫酸製造の実験工場でもあったが、技術が未熟で鋼鉄が造れず、硫酸の品位も悪い上に硫酸の需要が少なかったので、ワンマン広瀬幸平への批判も伴って閉鎖した。製錬の着手は、官製の八幡製鉄所よりも7年早い取り組みである。

精錬は金属の純度を上げること。製錬は鉱石から金属を取り出すこと。

P056 **工場の建設は明治29年に始まった。予算は初め80万円を組んでいたが、実際には180万円ほどかかった。**

四阪島製錬所の建設には当初約50万円の起業費があてられたが、工事が完了した明治37年末には170万円余にも達していた。

P056 **高さ六十四メートルの大煙突は使用を中止、再び島に緑がよみがえるようになった。**

大正13年建設の大煙突の高さは64.2m。

第二部 くらし・労働

ヤマの人々の独特の生活文化と我が国の労働運動史に残した特異な足跡を探る。

P067 **大鉛とは重さ約940キロもある大きな良質の銅鉱石のこと。**

大鉛は約300kg。

P069 **大鉛は長さ1.3m、高さ1.3m、底の幅1.09m、胴の最もくらんだ部分の幅は1.7m。**

大鉛は長さ19寸(0.58m)、高さ13寸(0.39m)、底の幅10.9寸(0.36m)、胴の最もくらんだ部分の幅は11.4寸(0.38m)。

P070 **別子開坑の元禄4年、住友家の祖泉屋が越智郡大三島町の大山祇神社に勧請、分社を――。**

大山積神社の勧請は元禄7年の大火災後。

別子開坑(1391年)。

別子開坑は1691年。

P070 **鉄鎚(セツトウ)の音。**

セツトウとは、明治の近代化でヨーロッパから入ってきた手掘用片手ハンマー。フランス語のマーセットを短縮して「セツトウ」呼んだ。「石刀」「石頭」

と漢字で書くことがある。岩を穿つ田金を打ったり、支柱工具として使用。セツトウ節自体は古くからうたわれたであろうが、セツトウ節の命名は、セツトウの語源からして、近代化以降となる。

P072

さざえのからに魚油を入れ。

明るく燃焼の良い鯨油を入れた。

P079

箱樋――くみ上げる高さは、最低部からだと百廿余あったという。

ルイ・ラロックの計測記録から計算すると、最低部の三角から寛永疎水まで317.67m引き上げている。

P082

砕かれた鉍石は焼鉍がまに入れられて――四、五十日も焼く。

焼窯で30日間蒸し焼きにして硫黄を燃やす。

P083

純度97.8%の粗銅ができ上る。

粗銅は純度は約90%。

P086

別子銅山運搬ルートの変せん地図 ②元禄15年～寛延2年、③寛延2年～明治15年

曇ヶ原越えルートの第2次泉屋道は計画の申請のみなので、銅山越えから端出場ルートの「第3次泉屋道は元禄15年～明治13年」となる。

P086

明治十四年、銅山峰を越えて新居浜に通ずる牛車道の完成で――。

銅山越えを通り立川中宿に至る牛車道の完成は明治13年。明治8年から新居浜口屋～立川中宿で部分使用されていた牛車は、翌年には全線で使用されるようになった。

P087

元禄15年(1702)西條藩領内に運搬路建設を認めさせ、曇ヶ原峠、立川を通過して新居浜浦へ至る18キロのルートを開いた。――、寛政2年(1749)には立川銅山の合併を認めた。これにより住友は念願の最短ルートを握り、新居浜浦に輸送基地となる口屋を、立川に仲持の中継基地となる中宿を設けた。

口屋の開設は元禄15年。曇ヶ原越えの第2次泉屋道は計画申請のみで、足谷川沿いの第3次泉屋道を元禄15年3月以降に着手し、8月以降使用したと言われている。

P088

牛車道は、――。現在も銅山峰南側に跡が残っているが、新居浜側ではほとんど壊れてしまっている。

新居浜側では、上部鉄道に並行していた牛車道は壊れているが、市道・立川本線や林道として一部が使われている。

P088

江戸時代には徳川家康が山例五十三ヶ条を制定、山師、金掘師を「野武士」と名乗らせ厚遇した。

石見銀山世界遺産センター刊行の「石見銀山遺産ノート」に収録されている「石見銀山の鉍山社会と法規制について」で松岡美由紀は、「鉍山法として最も知られているのは徳川家康が天正元年(1573)に発布したとされる『山例五

十三ヶ条』であろう。これが偽書であることは森嘉兵衛「近世鉱山法の研究」などこれまでの研究で指摘されている通りで、後世に山師などの側から身分的保証の根拠とするために作られたものと言われている。しかしながら、鉱山でのみ摘要される法的秩序は各地の鉱山で存在した。

正しくは、東照権現御遺書鉱山書五十三ヶ条宝巻。鉱夫の地位を高くするために作られた偽書。」

P088 **親子関係は、明治末までの飯場制度の中で重要な位置を占めた。**

別子において坑夫取立をするようになったのは明治二十四、五年頃。飯場が設立されてからである。さて取立を志願する坑夫がある場合は、先ずその坑夫の所属せる飯場から選ばれた世話人が職親(親分)及び兄分を記載せる目録(下免状)を作り、各飯場及び近隣の鉱山を廻って立会を依頼する。立会の依頼を受けた各飯場及び鉱山は立会人を定めて予めその出席を通知する。かくして世話人が中心となり、立会及び職親、兄分を招いて取立式を行うのである。式に要する費用は全て取立鉱夫の負担とし親分兄分及び飯場の同僚は、一定の祝儀を出す例になっていた。(昭和15年8月15日発行「親善」第1巻第3号・別子銅山開坑二百五十年記念特輯号から)

P099 **角野の瑞王寺から禅僧、―――**

「瑞王寺」は、「瑞応寺」の校正ミス。

P101 **広瀬は「半生物語」にこう記している。**

「半生物語」は、「半世物語」の校正ミス。

P114 **終戦直前、新居浜には住友各社のほか駅、港などでオーストラリア、オランダなどの連合軍捕虜が働かされた。**

俘虜収容所令の公布	昭和16年12月24日
新居浜俘虜収容所の開設	昭和18年4月12日(森実組の宿舎)
新居浜俘虜収容所の収容開始	昭和18年6月17日
新居浜俘虜収容所の磯浦移転	その後
山根収容所の開設	昭和19年11月18日

P124 **大正四年に別子採鉱本部が東延から移転―――。**

東延から東平への採鉱本部の移転は、大正5年。

P128 **本山坑の坑道の総延長は新居浜から名古屋に至る長さ。掘出した鉱石二千八百万ト、銅換算では七十万トン。**

坑道の総延長は700kmで、直線距離で新居浜から佐渡まで。新居浜から名古屋までの鉄路では460kmでしかない。銅鉱石は3,000万トン、銅にして65万トン。(足尾銅山の坑道の総延長は1,234km)

第三部 公害とのたたかい

別子銅山には、新居浜市や住友財閥発展の原動力になった点と300年にわたって住民を苦しめ続けた公害の歴史である。社会問題化した煙害問題の影で起っていた鉍毒水に焦点を当て書き始め、煙害問題、排水問題、再び大気汚染と綴る。そして、最後にフッ素公害による岩鍋地区の集団移転による緊急避難の解決を記録する。現在の事件・問題となると新聞記者の日々の取材ノートが、過去の資料による綴る通り一遍の文章とは違い、ペンが走った文章となってくる。しかし、実証伝達の技は、現況を知らずところまでが限界である。

- P133 **写真説明文中 二百年にわたって鉍毒を運んだ国領川、向こうの山は銅山峰**
上兜山、串ヶ峰からの稜線が種子川に下り、西赤石山からの錦繡峰の稜線が一度上がって犬返しへと下る。かすかに犬返しの上に西山が見え、西山からの左へ緩傾斜で下る銅山峰が顔を覗かしている。「向こうの山は銅山峰」と言われたら、串ヶ峰と西赤石山の間雲ヶ原の釣り尾根を銅山峰と間違えう。
- P137 **「中根の収銅所――。」**
中根は、山根の校正ミス。
- P138 **明治三十九年、別子銅山に第三通洞が完成した**
第三通洞の完成は明治35年。
- P166 **大正十四年以来、煙をはかなくなった大煙突は、――**
四阪製錬所の三代目の大煙突の完成は、大正13年11月。

第四部 住友と自治体

新居浜市と別子山村の歴史は、住友なくしては語れない。別子銅山の盛衰と共にしてきた歴史がある。別子山は別子銅山の閉山を目前にして村の存亡の淵に立たされている。工業都市に発展してきた新居浜市も住友の町としてその影響は計り知れない。「市民の6割が住友とつながりがある。」「住友がくしゃみをすれば新居浜市がかぜをひく。」「自主財源6割。」「港務局管理の港」「市議会議員も1/3は住友議員。」「公害と企業誘致。」「脱住友と住友との共存共栄の狭間。」地方自治の苦悩が浮かび上がる。

- P185 **明治三十二年の別子大水害で、旧別子から精錬施設などが新居浜に移り、さらに大正二年、住友総本店直営の肥料製造所が設立されてから工業都市の性格を強めた。**
明治7～8年にかけて、現地調査に基づいてルイ・ラロックが作成した「別子鉍山目論見書」で、将来の売鉍も視野に入れて惣開製錬所を建設し、臨海工業都市を構想していた。広瀬宰平は日本人の手で実施する。更に明治21年には、山根湿式製錬所を建設し、製鉄、硫酸製造を試み、鉍山町から工業都市への転換を企みたが技術が未熟で遂行できなかった。現存する山根湿式

製錬所の煙突は、工業立国へのモニュメントである。

肥料製造所の設立は、煙害問題解消へのワンステップであった。

昭和になって「地方後栄策」を唱え、工業都市の本格的整備を着手した鷺尾勘解治は、新居浜のまちづくりの中興の祖である。

P193 **住友別子病院、明治十七年、鉾山従業員の診療所として旧別子で発足、**
別子病院の設置は明治16年。

P193 **泉寿亭 住友接待館として昭和十七年、北新町に新築。**

泉寿亭は、西条で旅館を営んでいた越智伊平が、惣開の住友分店から招かれて泉寿亭と号して旅館兼料理屋を開業した。明治23年の別子開坑二百年祭の宿泊施設としての開業と考えられる。

明治23年に、別子開坑二百年祭の迎賓館として住友のお抱え大工・八木甚兵衛が広瀬邸新座敷を竣工したのに引き続き、惣開に接待館を設計・施工しているの、接待館は別にある。

北新町への建設は、昭和15年の別子開坑二百年五十年祭の事業の一環として、昭和12年(1937)12月に惣開から移転し増築され、昭和13年(1938)3月に竣工する。なお、接待館にあたる住友倶楽部は、昭和12年に王子町に洋館仕立てで新築される。

P197 **鷺尾常務の大築港構想だ。その骨子は住友肥料製造所(現住友化学新居浜製造所)の埋立地を御代島まで延ばすのをはじめ中須賀、大江、菊本地先と合わせて約百万平方メートルを埋立て、堤防を延ばすとともに、港内を十メートルにしゅんせつするもの。**

鷺尾が常務理事に命じられるのは、昭和6年2月24日。この栄進で以て新居浜を去る。大築港構想は支配人として住友別子鉾山の別子所長を務めていた時である。

埋立て、しゅんせつだけではなかった。東川河口右岸の喜七郎新田の半分は港湾区域として海になっている。喜七郎新田の北側の堤防部分に棧橋が設けられて、関西汽船、バンパックフェリー等の乗降場となった。

P205 **メモ 昭和通り 一一一住友と地元の共存共栄をという意味で、途中で鷺尾氏の命名による「共存橋」「共栄橋」の二つがかかっている。**

鉾石量調査の結果、別子銅山の鉾脈は後17年で尽きる結果を得た鷺尾勘解治は、銅山が無くなっても地域社会が興廃しないように新居浜の後栄策を提言し、企業と地域社会の「共存共栄」という理念を、昭和通りに「共存橋」「共栄橋」と懐けて示した。その考えにうそ、偽りがない意思表示として昭和橋の北の小橋に「申孝橋」と命名した。3つの橋名で鷺尾の考えが完結する。